

融雪促進に係る営農技術対策

平成24年2月23日
北海道農政部

平成24年2月23日発表された北海道地方3か月予報では、
『3月は、天気は数日の周期で変わるでしょう。オホーツク海側・太平洋側では、
平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は、平年並または高い確率とも40
%です。』と予想されていますが、今冬(12月～2月)の大雪の影響から、融雪にか
かなりの遅れが見込まれるため、以下の対策を参考に春期の作業が遅れないよう融雪
促進などに努めてください。

第1 ビニールハウスの被害対策

- 1 雪が積ってきたら速やかに雪降ろしを行い、ビニールが雪でたるんだり、滑落しなくなるのを防止する。
- 2 ハウスの気密性を高めるとともに、加温施設がある場合は可能な範囲で加温し、また、二重ハウスの場合は日中内張を開放するなどして、外張り天張面を温め落雪を促す。
ただし、ハウス内に育苗中の作物や栽培作物がある場合は、作物の適温管理の範囲内とする。
- 3 吹き溜まりやハウス片側落雪があると、負荷がアンバランスとなりハウスがゆがむことがあるので、速やかに除雪する。
- 4 融雪水がハウス内に入り込まないように、ハウス周辺の排水路を確保して速やかな排水に努める。
- 5 ハウスのビニールをはずし、パイプのみの場合も、放置しておくことと雪の重みでゆがみが生じる恐れもあるので、速やかに除雪する。
また、パイプ破損の有無を確認し、破損等がある場合、早めに資材の準備をする。

第2 融雪の促進(共通事項)

- 1 融雪材の散布時期
本年の降雪量は、日本海側で多く、融雪の遅れが懸念される。積雪の多い地域は、育苗や耕起作業の遅れや、秋まき小麦の雪腐病などの作物被害が発生しないよう融雪材を散布し融雪を促進する。
融雪材の散布時期は、日平均気温が -3°C 以上になると日中はプラスの気温とな

り雪解けが進むので、この頃を目安とする。

融雪材は、吹き溜まりや防風林の際など積雪量の多い場所には確実に散布する。

また、融雪材を均一に散布するよりムラに散布する方が、雪解けが始まった時に表面積が増加し、融雪が促進される。

表1 平成24年2月23日現在の主なアメダス地点の積雪深と平年値

地 点	最深積雪深 cm (H24)	最深積雪深 cm (平年値)	根雪終日 ¹⁾ (平年値)
札幌	60	77	4月3日
旭川	85	75	4月8日
留萌	102	66	4月5日*
岩見沢	179	96	4月6日*
小樽	102	100	—
倶知安	208	162	4月18日*
網走	48	39	4月3日
帯広	46	40	3月21日
苫小牧	27	12	3月8日*
函館	58	27	3月13日

1) 1981～2010年の平年値、*は1971～2000年の平年値。

2 融雪材の散布量と回数

融雪材の散布により、融雪は10日以上早まる。

水田にはケイ酸質資材を10a当たり90～120kg、畑には融雪防散炭カルやアッシュを40～60kg散布する。

融雪材の散布後に20cm以上の降雪がある場合は効果が小さくなるので、再散布に対応できるように資材の確保に努める。

3 融雪水の排除

融雪水がほ場に停滞することがあるので、排水溝が十分に機能するように整備し、速やかに排除できるようにする。

第3 水稻

健苗育成には、床土の十分な乾燥と適期は種が重要である。そのためには、育苗ハウス設置場所の除排雪を行い、3月中にビニール張りを完了する必要がある。

融雪材を使う場合は、水稻苗代専用融雪材か床土と同じ土壌を散布する。

第4 畑作物

秋まき小麦は雪腐病の軽減や生育期間確保のため、融雪材を散布して早期の融雪に努める。また、春まき小麦やてん菜・馬鈴しょを作付け予定のほ場も、は種作業や移植作業が遅れないよう、融雪促進に努め、ほ場の乾燥化を図る。

融雪水がほ場に滞水すると、秋まき小麦の生育が遅れるほか、枯死しやすくなるため、排水溝が十分に機能するように整備する。

第5 施設園芸

1 ハウス周辺の融雪促進

融雪の遅れでハウスの定植準備が進まない恐れがある。ハウス内と周辺に融雪材を散布し、できるだけ早く除雪機が入れるように融雪促進に努める。

2 育苗管理

育苗管理にあたっては、定植の遅れに備えて次の点に留意する。

- (1) 温度管理は適温の範囲内で低めとする（極端な低温管理はトマトでチャック・窓開き果が多発するなど苗質の低下を招くため、あくまでも適温内で管理する）。
- (2) 灌水は控えめとするが、極端に萎れさせないようにする。
- (3) 鉢の間隔を広げて苗が徒長しないようにする。
- (4) 定植が遅れて肥料切れを起こしそうな場合には、液肥等で追肥を行う。

第6 露地野菜

- 1 スイートコーン、だいこん、にんじんなどの早出し栽培を予定している畑では、融雪の遅れにより、は種作業が遅れたり、低地温による発芽の遅れや抽苔の恐れがある。また、短根や「ひげ根」の多発、形状の悪化等（だいこん、にんじん）も懸念されるので、融雪促進と排水に努め、地温上昇を促す。
- 2 早期は種たまねぎやキャベツなどの定植を予定している畑でも、融雪の遅れによる定植作業の遅れ、老化苗定植による活着不良や初期生育不良、タネバエの被害等の恐れがあるので、融雪促進に努める。
- 3 露地アスパラガス畑では、融雪の遅れにより萌芽が遅れて収穫時期が短縮され、低収となる恐れがあるので、融雪促進に努める。

第7 果樹

1 融雪促進と融雪水の停滞防止

融雪を促進するとともに雪質をザラメ化することで枝折れを防止することができるので、融雪材を散布する。また、融雪水が停滞する場所は簡易な溝切りを行い早期排水に努める。

2 雪害対策

- (1) 施設の破損を防ぐため、雨どいの雪下ろしやぶどう棚外周の架線を引き上げた

り、架線上の除雪を励行する。

(2) 枝折れを防ぐため、雪に埋まった枝は沈下しないうちに可能な限り掘りおこす。

なお、その際、細かい枝を折らないように十分注意する。

また、雪が固まり掘り起こしが困難な場合、スコップで雪に切れ目をいれたり、樹冠下の雪踏みを励行する。

(3) 主枝の付け根から折損すると主幹が大きく裂けることがあるので、主枝を早めに切り取る。主枝や側枝に枝おれが発生した場合、切り直しをして癒合剤を塗布する。

3 整枝せん定の留意点とヤソ(野鼠)対策

(1) せん定作業が遅れないように、春先の作業から逆算して計画的に進める。せん定に当たっては、上部の枝をやや多めに残し、下枝の状況で手直しを考えた
り、鋸による粗切りで作業時間を調節するなど工夫する。

(2) ヤソ害が懸念されるので、雪踏みや殺鼠剤の散布で樹体を保護する。

第8 酪農・畜産

1 ほ場滞水と冬枯れ対策

低地、くぼ地のある草地では、アイスシートや停滞水による冬枯れが発生しやすいので、溝切りなどを行い排水に努める。

2 ふん尿貯留施設及び周辺環境対策

融雪水がふん尿貯留施設に流れ込むと「れき汁」が外部に流出する危険があるので、施設周辺に側溝を設ける。

3 畜舎・施設の対策

農場敷地内排雪場の排水路を確保し、畜舎、パドック及びサイロへの融雪水等の浸入を防止する。畜舎等へ融雪水等の浸水が予想される場合は、入口に排水路を確保する等の予防策を講じる。

農場内の作業通路は排水に留意し、泥濘化、水溜まりをなくす。

お問い合わせ先：食の安全推進局技術普及課（電話011-231-4111 内線27-823）